

人とかかわる力を育てるための環境構成と援助の工夫

～仲間とかかわり群れて遊ぶ姿を通して～

糸満市立西崎幼稚園教諭 上原 弥生

I テーマ設定の理由

少子化、都市化、情報化などの進展に伴って、家庭や地域での人との関わりの体験が減少し、現代の日本社会は子どもが育つ環境として、かつてないほどに不利な条件を抱え、子どもの成長支援はいまや社会的課題の一つとなっている。また、遊びを取り巻く環境においても、遊び場と切磋琢磨して遊ぶ機会の減少に伴い大きく変化していると思われる。そのことは、幼児の人とかかわる力の育ちに影響し、今日的な教育課題につながっていると考える。

幼稚園教育要領の領域「人間関係」(2)のねらいは、教師が幼児一人一人の体験の質や量の違いを考慮に入れて、身近な人と親しむところからいねいに援助していくことが必要であることを表している。また内容の取り扱い(2)では、「幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり、豊かになるものであり、幼児はその中で互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ、一人一人を生かした集団を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること。特に、集団生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること。」とある。教師が幼児一人一人に対応し、そのよさや特性を認めていくことが幼児の自己を肯定的に捉える姿の基盤となる。その上で、互いに必要な存在であることを子どもたちに伝えていくことが、幼児の肯定的な人間関係に寄与し、一人一人がかけがえのない存在であることを感じ、自信を持つことにつながることを示している。

幼稚園において、教師や友達とふれ合う中で、自己の存在感や友達と一緒に過ごすことの楽しさを味わい、ときには幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して、互いに理解し合う体験を重ねることの重要性を痛感する。

本園の幼児の実態をみると、人懐っこく元気があり、ほとんどの幼児が友達と一緒に遊びを楽しんでいる。しかし、自分の思いをうまく伝えることができずに友達とトラブルになり、遊びを転々と変える幼児や、自分の興味のあるもの以外には関心を示さず、友達とのかかわりが少ない幼児も見られる。

これまでの保育を振り返ってみると、どうにか友達とかかわらせようとの教師の思いが先行して、一人一人に寄り添った援助ができていなかったのではと反省する点が多々ある。また、じっくり遊び込むための環境づくりへの取り組みが弱く、遊びが発展せず友達との関係が深まらなかったのではないかと考える。

幼児一人一人の育ちや背景をしっかりと捉えその特性を理解し、幼児が自己発揮をして「仲間と群れて遊ぶことが楽しい」と思えるような環境構成や援助の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

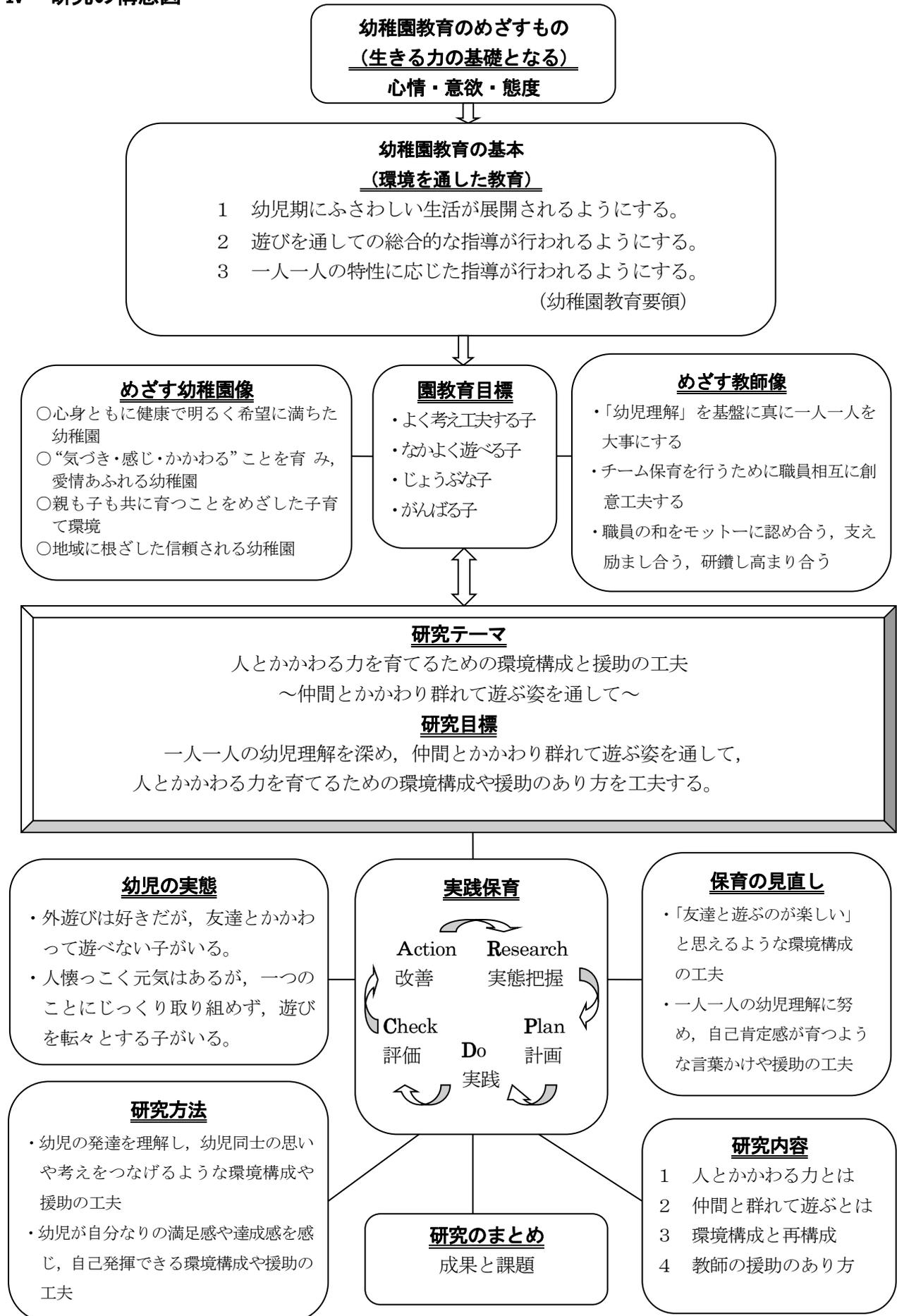
II 研究の目標

一人一人の幼児理解を深め、仲間とかかわり群れて遊ぶ姿を通して、人とかかわる力を育てるための環境構成や援助のあり方を工夫する。

III 研究の方法

- 1 幼児の発達を理解し、幼児同士の思いや考えをつなげるような環境構成や援助の工夫
- 2 幼児が自分なりの満足感や達成感を感じ、自己発揮できる環境構成や援助の工夫

IV 研究の構想図



V 研究の内容

1 人とかかわる力とは

人とかかわる基礎は、自分が周囲の人々にあたたかく見守られているという安心感から生じる信頼感と、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる。具体的には幼稚園の生活に適応すること、主体的に活動に取り組み生活を展開すること、友達や身近な人々とふれあう楽しみや喜びを実感できるようになること、友達との生活の中できまりや秩序などの必要性に気づくこと、社会生活に必要な習慣や態度を身につけることなどを含む。人間関係の内容の取り扱いでは、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わうことができるようにすることや、幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり豊かなものになること、などが強調されている。また人とのかかわりにおいては、集団への適応や集団行動がとれるようになることを早急に期待するのではなく、心と心が深くふれあうようなかかわりを大切にしながら、トラブルや葛藤の体験をくぐる必要があるとされている。

2 仲間と群れて遊ぶとは

自らの興味・関心に基づいて、主体的に友達とかかわり合っ一緒に遊び、思い思いの遊びを夢中になって意欲的に展開する姿を群れ遊びと捉え、群れることで〇〇ちゃんがいるから安心という心の安定が図られ、仲間同士がつながり、お互いを助け合う心地よい関係が作られていくのだと考える。その中で、お互いの自己主張によるぶつかり合いや葛藤、共感する楽しさや喜びなど様々な感情体験をすることで、自分と他者との違いに気づき、心を通わせ、経験を通して人とかかわる力が育っていくと考えられる。一緒に遊んだり、模倣をしたり、刺激し合ったりしながら、共通の目的を持ち、その目的に向かってお互いの思いを出し合い協力して協同的な遊びを展開するようになってくる。群れ遊びによって、仲間と楽しく遊びをつくり出す力、自己肯定感、自信が育ち、さらに遊びに広がりや深まりをもたらす。

3 環境の構成と再構成

(1) 計画的な環境の構成

幼児が活動への意欲をもち、主体的な活動を展開するようになるためには、幼児の中に興味や関心がわいてきて、かかわらずにはいられない、あるいは活動を展開することができるような幼児にとって意味のある物的・空間的な環境の構成が必要とされる。

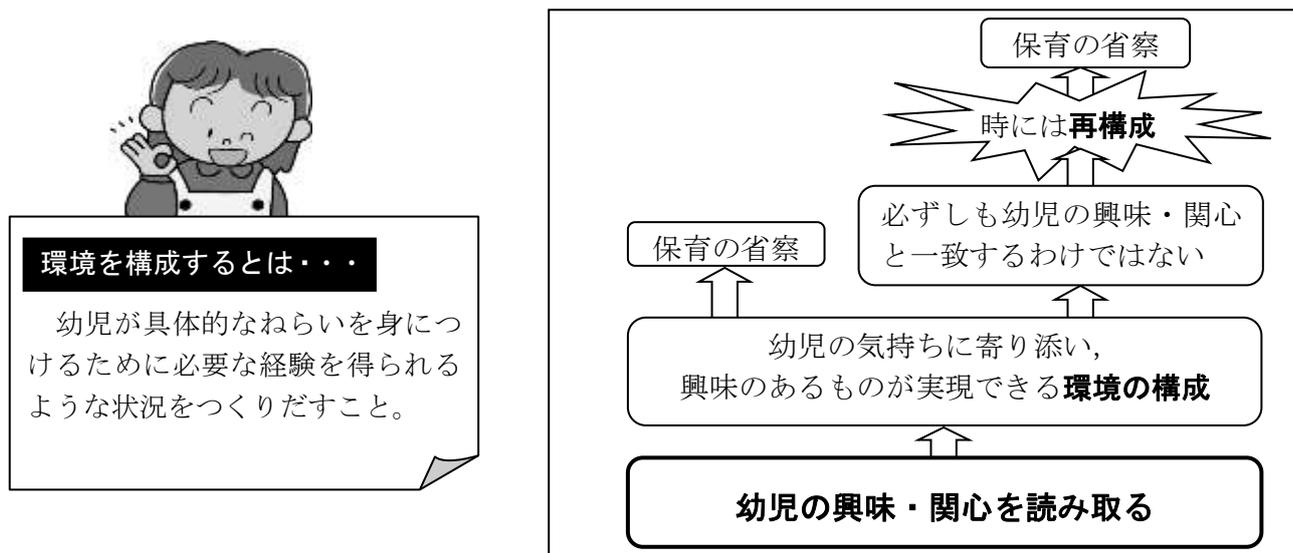
幼児にとって意味のある環境とするための視点として

- ① 指導計画は、子どもの視点を忘れず、内容・環境の構成を行い、子どもの願いが込められたものであること。
- ② 環境の構成は、子どもの動線を考えた園具や遊具、園の自然環境、教師間の協力体制など、園全体が教育環境として整っていること。
- ③ 教師のかかわりは、一人一人の発達の見通しをもち、状況や場面を見ながら様々に行うことがあげられる。

教師は、常に生まれてきた遊びに沿って、発達に必要な経験が得られるための援助を繰り返していかねばならない。その時期に何を育てていくのかを見通した計画が必要であり、同時に偶然の出来事を幼児とともに楽しむゆとりも必要である。計画性と偶然性が、幼児の主体的な活動を支えるのである。幼児にとって意味のある環境とは、強い制限がなく、自分の環境としてかかわっていることであり、教師に確認してから行うものではなく、自分の考えが働かされる(主体性)、心に響く環境になっているかが重要である。

(2) 環境を再構成するとは

環境はただあればよいというものではない。それが子どもにとってどのような意味をもっているのか、子どもがそれをどのように受け止めているのかを問うことが重要である。遊びの展開の中で、次々と環境のもつ意味が変化していくことも多い。そうした意味から「幼稚園教育要領解説」では、「幼児の活動の展開は多様な方向に躍動的に変化するものであり、常に見通しと一致するわけではない。したがって、計画を立てて環境を用意すればそれでよいというわけではない。常に活動に沿って環境を構成し直し、その状況での幼児の活動から次の見通しや計画をもち、再構成し続けていくことが必要になるのである」と留意点を述べている〈図1〉。

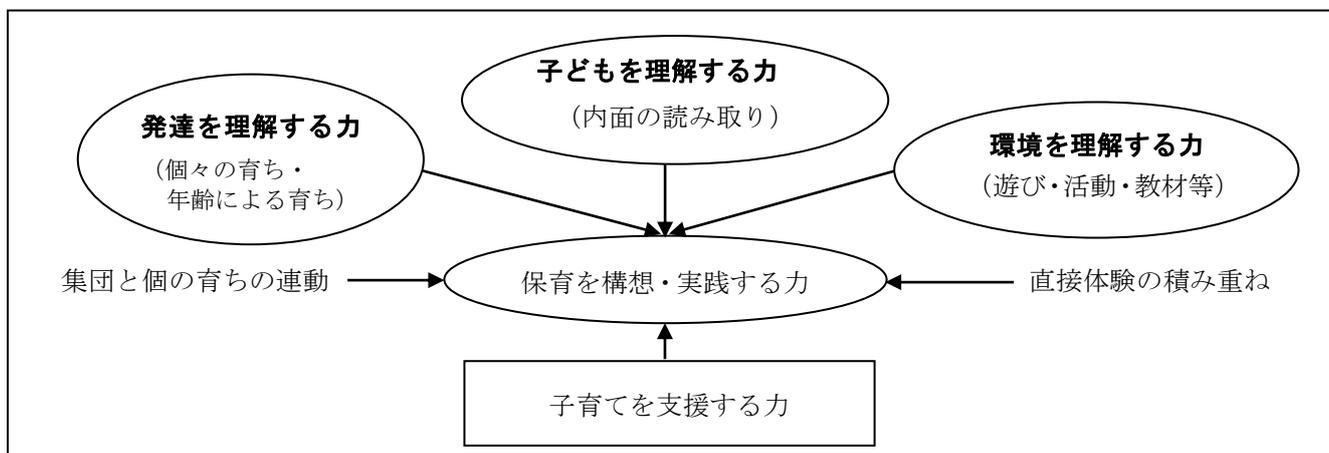


〈図1〉 環境構成のあり方

4 教師の援助のあり方

教師の役割とは、子どもとある一定の期間、時間と場所を共有しながら、集団のなかで一人一人の子どもがよりよく自己を拡大していくための援助を行うことである。

教師は子どもの様子を見極め、遊びや生活が豊かになるように環境を通して働きかけていく。子どもとともに動き、遊びのおもしろさを伝えもする。受け止める役割、伝える役割、環境を構成したり具体的に援助したりする役割、モデルとして動く役割等、場面に応じてさまざまな役割を果たすことが求められる。では、何を根拠にして自分のとるべき役割を判断するのか。その根拠となるのが「理解」である。つまり、保育者として必要な資質〈図2〉が求められる。園において、子どもとは「集団のなかの子ども」である。子どもを理解するとは、他者との関係性のなかでその子どもが今、どのようなことに心を動かされ、どのような課題を抱えているかを見極めることである。



〈図2〉 保育者に必要な資質

VI 研究の実際

1 保育実践

① 「みんなで遊ぶと楽しいね」 (5月)

【幼児の姿】

幼稚園での生活にも慣れ、友達と一緒に遊ぶ姿も見られるようになってきた。中には、1人でパズルをしたり、絵を描いたり、友達とのかかわりがもてない子もいる。

【ねがい】

・友達と触れ合いながら、一緒に遊ぶ楽しさを感じて欲しい。

・雨天のため、室内でそれぞれの遊びを楽しんでいる。新聞紙やチラシで遊んでいる幼児が数名いたので、そこから全体への遊びにつなげられないかと考えた。

【活動の流れ】

- ・友達集まれ
- ・新聞宝島
- ・新聞オリンピック
- ・新聞プール
- ・新聞紙音楽隊
- ・ヨーヨーづくり

【援助】

- ・友達と触れ合ったり、協力したりできるようなゲームを取り入れる。
- ・幼児同士のかかわりを見守りながら、教師もいっしょに遊び、楽しさを共感する。
- ・無理に誘うのではなく、幼児のやってみたいと思う気持ちに寄り添う。

触れ合うことでぬくもり(体温)を感じ、仲間とのつながりや安心感が生まれたのではないか。

大好きなA男が楽しそうにしている姿を見て、H男もやってみようという気持ちになったのではないか。(H男が一步踏み出した瞬間)

新聞プール



心を解放し、遊びにのめり込んでいる様子(意欲)が伺える。

新聞宝島



新聞オリンピック



「〇〇さんより長くするぞ」と友達の存在を意識する事で、一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができたのではないか。

遊ぶ時間を十分に保証したことで充実感を味わい、満足したことから片付けもしっかり行えたのではないか。

【幼児の変容】

- ・自分から遊びに入れなかったH男が、A男と一緒に触れ合って遊ぶ経験をしたことで、心を解放し笑顔で楽しむ姿が見られるようになった。
- ・これまで友達のしていることに興味を示さなかったA子が、友達の遊ぶ姿を笑顔で眺める姿があった。

【考察】

- ・幼児同士が触れ合って遊ぶゲームを用意し、教師も一緒に楽しみながら遊びを進めることで、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができたのではないか。
- ・友達のしていることに関心をもっているA子の姿から、友達と一緒に遊ぶきっかけとなったのではないか。

② 「虫網がほしいな」R男のつぶやきから (6月)

【幼児の姿】

ほとんどの幼児が砂場や虫探しなど友達とかかわって遊ぶ姿が見られるようになってきた。中には興味のある遊びが見つからず、あちこち動き回っている幼児もいる。

【ねがい】

・好きな遊びを見つけ、友達と一緒に楽しんで取り組んで欲しい。

【援助】

・幼児がイメージしたものが作れるように、子ども達と一緒に道具や用具の準備をする。
・自分なりに作り方を工夫している姿を見守り、認めていく。
・できた作品を紹介することで、さらなる意欲へとつなげ、周りへの刺激となるようにする。

虫網作りをする友達を眺めるA子。教師が「一緒に作る？」と促すと首を横に振るが、「ここを掴まえてくれるかな？」と言葉をかけることで、友達の虫網づくりを手伝うことができた。友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わうきっかけとなるのではないかな。



虫網を作る場を、戸外遊びをしている幼児からも見えるベランダに設けたことで、友達のしていることに興味をもった幼児が数名集まってきた。友達とのかかわりの薄いR男とつながってくれるのではないかな。



虫網が欲しいと言ってきたR男と教師が虫網作りを始めた。

取り組みの様子を帰りの会でとりあげて紹介し、幼児の目につく場所に虫網を片付ける場所を設けたことで、他の子の刺激となり、自分もやってみたいという意欲と一緒にやってみようという友達とのかかわりにつながってほしいと考えた。

R男のアイデアを認め、ちびっ子先生になってもらうことで自信につながると考えた。



幼児が取り出しやすいように、道具や用具を幼児と一緒に準備をすることで、自分達で作ろうという意欲につながると考えた。

すぐにR男の欲しい物を渡すのではなく、「代わりになる物がないか」考えさせたことによって、自分なりのアイデアで工夫する姿につながったのではないかな。



【変容】

- ・これまでは「先生作って～」と言っていた子ども達が、友達の作った物を見たり作り方を教えてもらったりするようになり、かかわる姿が見られるようになってきた。
- ・「幼稚園楽しくない」と言っていたR男が、やりたいことを見つけ、自分から楽しんで取り組んでいた。
- ・他児の遊びを眺めているだけだったA子が、お手伝いという形で友達とかかわれるようになってきた。

【考察】

- ・教師が良いアイデアの子を紹介したことで友達の良さに気づき、教えてもらおうとする姿が見られ、共通の目的に向かって取り組むことで、一緒にせみ捕りを楽しむ姿につながったのではないかな。
- ・欲しかった虫網を自分の力で作ったことが、R男の達成感や自信となり、自己発揮する姿につながったのではないかな。
- ・幼児がじっくりと取り組めるように道具や用具を準備し、場や時間を確保したことで、幼児同士がかかわり合いながら取り組む姿につながったのではないかな。

2 検証保育

(1) 設定理由

これまで人とかかわる力を育てるため、実践保育①、②を通して幼児が興味・関心がもてるような遊びの工夫を行ってきた。結果として、幼児の興味・関心に添って、発達に応じた教師の援助が大切であることや、幼児の気持ちに寄り添いながら、援助していくことの大切さが分かった。

そこで、今回の検証保育においては、幼児同士がかかわり群れて遊ぶことのできるような環境の構成や援助の工夫をしていきたいと考え設定した。

(2) 保育のねらい

- ・友達と一緒に考えを出し合いながら、遊びを楽しむ。

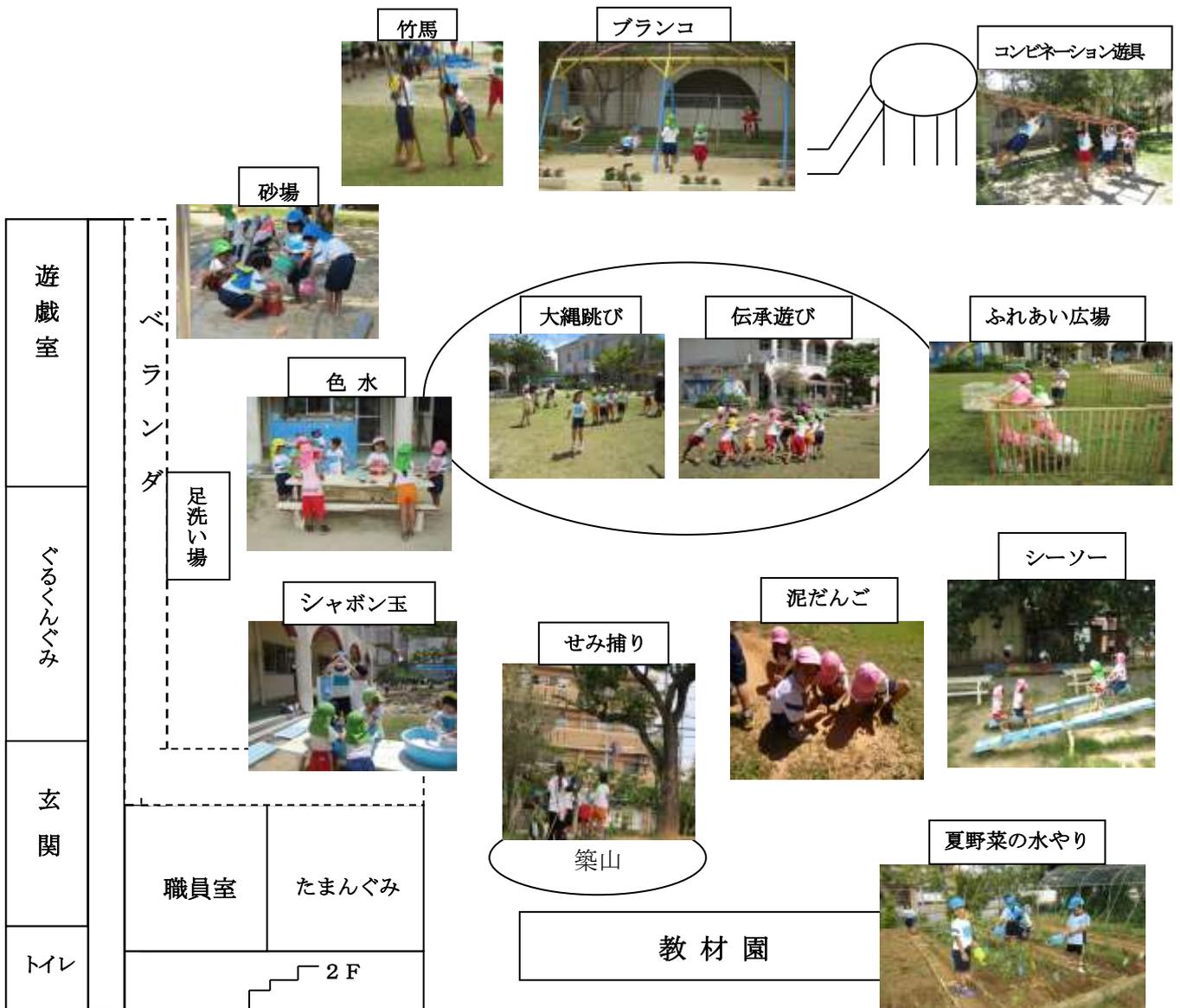
(3) 保育の内容

- ・友達と好きな遊びを楽しむ。
- ・自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら遊ぶ。

(4) 検証のねらい

- ・幼児が会話を交わしながら、夢中になって遊べるような環境構成と援助の工夫をする。
- ・仲間に入れられない子への適切な読み取りをして援助の工夫をする。

(5) 本時の園庭の環境構成図



(6) 保育の展開 (本時)

幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭では、泥だんごや砂だんご、池などを作って遊び、土や砂の感触を楽しんでいる。また、もらい鬼やガラガラがっちゃんなどの伝承遊びや大縄跳びなど友達と一緒に楽しめるようになってきた。しかし、中には、一人でぼつんとしている幼児や教師の傍にくっついてる幼児もいる。 ・時々遊具の奪い合いになるが、自分の気持ちを教師だけではなく、友達にも伝えようとする姿が見られるようになってきた。 ・室内では、笹飾りやセミなどの折り紙を友達と教え合って作る姿が見られる。 		
	予想される幼児の活動	○環境構成 ☆教師の援助	【】援助の視点 ※教育要領より
8 : 4 5	○朝の会	☆暑さが厳しいので、 <u>水分補給や帽子をかぶることの大切さ</u> について話し合い、自分達で意識をして行えるようにする。	【健康】 内容の取扱い (2) ○自分の体を大切に
9 : 0 0	○好きな遊びをする 【戸外】 砂場・色水・シャボン玉・泥だんご・せみ捕り・竹馬・大縄跳び・伝承遊び・ふれあい広場・固定遊具  【室内】 ままごと・折り紙・お絵描き・笹飾り作り 	○ <u>遊びたい時にすぐに遊べるよう、また遊びたくなる気持ち</u> が持てるように遊具などの置き場を一定にし、取り出しやすいように子ども達と一緒に準備をする。 ○涼しい環境で遊べるようにテントを用意し、暑さ対策に配慮する。 ☆自分から遊びに入れない子は、 <u>教師と一緒に楽しむこと</u> で友達と一緒に遊べるようにする。 ☆自分の思いや考えが相手に伝わるように、必要に応じて言葉かけをし、遊びが盛り上がるようにする。 ☆ <u>挑戦しようとする姿や友達と協力している姿</u> などを認め、周りの子どもにも知らせていくようにする。 ○虫取りでは捕った虫について調べることができるように、図鑑などを用意しておく。 ☆トラブルになった時はなるべく子ども達同士で解決できるように見守りながら、必要に応じて仲裁に入り、 <u>お互いの気持ちを代弁</u> していく。 ☆片付けも遊びの続きとなるように一緒に <u>行いながら、次回への期待ときれいになった気持ちよさ</u> を共感する。	【健康】 内容 (4) ○自己選択・決定 【環境】 内容 (7) ○興味 【人間関係】 内容 (1) ○安定感 【言葉】 内容 (3) ○思いの表現 【人間関係】 内容 (7)(8) ○友達の良さに気づく ○楽しさ・充実感 【環境】 内容の取扱い (3) ○探求心 【人間関係】 内容 (6) ○感情の交流 【健康】 内容 (8) ○見通しをもつ
10 : 3 0	○片付けをする		
反省評価	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に考えを出し合いながら、遊びを楽しむことができたか。 		

③ 「泥だんご作りを通して」 (7月)

【幼児の姿】

細かい土をかけてきれいなだんごを作っている幼児，なかなかきれいな丸ができない幼児，とそれぞれが夢中になって取り組んでいる。一緒に遊んでいるように見えるが，一人一人がそれぞれの思いで取り組んでいるため，友達同士のかかわり合いはあまり感じられない。

【ねがい】

・友達と一緒にだから楽しいということを実感し，目的を共有しながら取り組んで欲しい。

【援助】

- ・友達が工夫している姿に気づけるように様子を伝え，互いに教え合うことで，かかわりがもてるようにする。
- ・H男に対しては工夫していることを認めることで自信につなげ，作り方を教えることで他の幼児とかかわれるようにする。

築山での泥だんご作りは，せみ捕りをする幼児の邪魔になりトラブルになるが，話し合う場を設けたことで，邪魔にならない別の場所へ引っ越そうということになった。



泥だんごを作るのが上手なY子，帰りの会で「泥だんご名人」として紹介することで，Y子の自信と他の幼児への刺激になるように考えた。



泥だんご作りを楽しんでいるが，作ることから発展せず，翌日はまた別の幼児が作って遊んでいる状況で，友達とのつながりや遊びの継続につなげることができない。そこで，作った泥だんごを保管できるようにかごと容器，名前を書くペンを用意した。すると，さっそくそれを活用し，作ったものでまた翌日も継続して遊ぶ姿が見られるようになった。

集団生活が初めてのH男。教師と一緒に遊べるようになってきたが，まだまだ自分から遊びに加わることはない。友達の遊びに気づき興味を持って欲しいと思い，他の幼児の遊びが見え，声が聞こえる位置でH男と過ごすように心がけてきた。

「一緒にやってみる？」と尋ねると，一瞬ためらった様子だったが，「うん」と頷いて一緒に泥だんご作りを始めた。



翌朝「先生～，先生にプレゼント持ってきたよ。」と泥水のはいたペットボトルを手渡したH男に最初は何のことか戸惑ったが，前日のH男を思いだし，「あら，魔法の水持ってきたの？昨日よりもっといい泥だんごが作れそうだね」と声をかけると，嬉しそうに泥だんごを作る場所まで走っていった。

自分なりの目当てや期待をもって登園するH男の姿と捉えた。



前日より生き生きとした表情で泥だんご作りに取り組むH男の姿がある。土をこねて丸めた後，さらさらの土や砂をつけて工夫している。昨日，友達の作る様子をしっかりと観察していたのだろう。H男の工夫する姿を認め，自信につなげていくために，他の幼児へも作り方を教えてもらうようにした。

【幼児の変容】

- ・ 上手く泥だんごを作れない子は、友達から「手の平で何回も転がしたらいいよ」などと作り方のコツを教えてもらい、一緒に楽しむ姿が見られた。
- ・ 作った泥だんごを築山から転がし、友達と一緒に遊ぶ姿が見られた。
- ・ これまでは教師の傍で静かに遊んでいたH男が、「この砂をつけたらサラサラになるよ」と、作り方を工夫し友達に教える姿が見られた。また、教師の傍を離れ、友達と一緒に「泥だんご転がし競争」を楽しむ姿が見られた。

【考察】

- ・ 最初はそれぞれで取り組んでいたが、幼児同士がかかわりを持てるように、教師が工夫している子の様子を伝えることで、教え合いながら共通の目的に向かって取り組む姿につながったのではないかと。
- ・ これまで自分から遊びに加わることのなかったH男は、友達と一緒に泥だんごを作り上げた経験から達成感を感じ、転がし競争という次の目標を見つけ、それに向かって一緒に取り組む意欲へとつながったのではないかと。

(7) 検証保育（本時）の評価

① 環境構成の工夫

- ・ これまではクラス単位で担任の近くで遊ぶことが多かったが、たっぷり遊べる場と時間を確保したことで、3クラスが混ざり合っ一緒に遊ぶ姿が見られた。
- ・ 全体的に見て好きな遊びを見つけて遊んでいる姿と捉えていたが、一つ一つの遊びが園庭の周辺にあって分散していることや、友達とかかわって遊べるような場の工夫が足りず、遊び込める環境構成が不十分であった。

② 教師の援助

- ・ なかなか集団に馴染めない幼児に関しては、興味を示した遊びに教師と一緒に取り組むことで安心して他の幼児と遊ぶ姿が見られた。
- ・ 仲間に入れない幼児への援助に偏り、全体的な遊びの場面では見守り的な援助になってしまったために、幼児同士がかかわりのもてるような援助が不十分であった。

③ 改善点

- ・ 一つ一つの遊びの場を子ども達がやってみたくなるようにしかけ、遊びに意欲的に取り組めるように、また、友達同士共通の目的に向かって遊びを楽しめるようにした。
- ・ 教師も一緒になって遊びを楽しみ、時には仲介役となって、幼児同士がかかわりのもてるような援助を心がけるように、職員間で共通理解を図った。

【検証保育後】 → やってみたいくなるような環境構成の工夫

遊びが発展するよにとの思いから雨どいを用意したところ、ガムテープでつなげて泥だんごを転がして楽しむ姿が見られた。これまでは、途中で割れたら負けというルールだったが、雨どいから勢いよく転がるのを見て、泥だんごの転がる距離を競う新しいルールが生まれた。



段ボールと紙で作った得点表を準備したところ、競い合っ遊ぶようになった。楽しそうに遊ぶ姿を見て「仲間に入れて〜」と幼児が集まってきた。しばらく遊ぶうちに「ここまできたら5点、ここだったら10点」と新しいルールを加え、自分達で楽しむ姿があった。

VII 研究のまとめ

本研究においては、人とかかわる力を育てるために、幼児が仲間と群れて遊べるようになるための環境構成の工夫と援助のあり方を探りながら、保育実践を繰り返して行った。実践の結果（保育実践①②③）で分かったことをまとめる。

1 環境の工夫と援助の工夫から

		環境構成	教師の援助
保育実践① (5月)	「みんなですぐ遊ぶと楽しいね」	<ul style="list-style-type: none"> 心を解放し遊びにのめり込むには、じっくりと取り組める場と時間の確保が必要であることがわかった。 BGMを用意するなど、雰囲気づくりも大切であることを再確認した。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師も一緒に楽しむことが、幼児の「楽しそう・やってみよう」という気持ちにつながるということがわかった。 友達と触れ合うことでぬくもりが感じられるような集団遊びを、幼稚園の前期に多く取り入れることで安心感につなげ、仲間とのつながりが感じられるようにすることが大切である。
保育実践② (6月)	「虫網がほしいな」	<ul style="list-style-type: none"> 幼児の作品を掲示する場所を工夫することは、他の幼児の「やってみよう」という意欲につながるということがわかった。 材料となる廃品や道具を一定の位置に用意し、幼児がイメージしたものをすぐに作り出せるように、環境を整えておくことの大切さがわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児なりのアイデアを認めることは、幼児の自信や意欲につながっていくということを再確認した。 「これでできるよ」と教師がすぐに与えるのではなく、幼児が目的に向かって試行錯誤する過程を見守ることの大切さを感じた。
保育実践③ (7月)	「泥だんご作りを通して」	<ul style="list-style-type: none"> 遊びを継続していくには、幼児の活動の流れや心の動きを読み取り、環境を再構成していくことが大切であることがわかった。 環境の構成をする際には、幼児が互いの遊びの様子が見える位置、会話の聞こえる距離間が大事だということがわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達が工夫している姿を紹介する場を設けたことで、「私も〇〇さんのようにやってみよう」と刺激を受け、活動への意欲につながることを再認識した。 教師がある程度かかわり、幼児に任せていくタイミングを計ることの大切さがわかった。 遊びを継続していくためには、幼児の思いを整理する話し合いの場を設けることが必要だと感じた。

2 幼児の変容から

全体的に変容が見られたが、特に集団生活に馴染めなかった3名の幼児を抽出し、「幼児の姿の変容」を下記のようにまとめる。

	幼児の姿 (事前 4月の頃)	教師の援助	幼児の変容 (事後 7月の頃)
R男	<p>集団行動が苦手で、興味の赴くままに動いている。家庭でも園でも注意を受けることが多かった。「どうせ、怒るんでしょう」が口癖であった。何事にも否定的で、友達とのトラブルも絶えなかった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 〇場を確保し、素材の準備を一緒に行うことで、自分のしたいことにじっくりと取り組めるようにした。 〇虫網作りで工夫している姿を認め、ちびっ子先生になってもらい、そのことが自信につながるようにした。 	<p>友達に虫網の作り方を優しく教えたり、作った虫網で一緒にせみ取りを楽しんだりする姿が見られるようになった。</p>

A子	毎朝泣いて登園する。しばらく寄り添うと泣き止むが、表情も硬く、教師の問いかけにも首を横に振るだけで、言葉による意志の表示はない。促しても足を踏ん張るなどして教室には入ろうとしなかった。	○遊びに無理に誘うことはしないが、常に言葉をかけスキンシップを図り大切なクラスの仲間であることを伝えた。 ○友達の会話が聞こえる距離、遊びの様子が見える場所で、A子に教師の手伝いをしてもらうことで、友達の存在に気づき、やってみたい気持ちが生まれるように心がけた。	泣くこともなく元気に登園し、友達と楽しそうに遊ぶ姿があった。
H男	集団生活が初めてで、毎朝泣いて登園する。全てが初めての経験で、不安になり涙ぐみ、友達の遊びを傍観していることが多い。	○生活面では、一緒に行くことで不安を取り除き、できた時は認めたり褒めたりしてできるだけ自分でしようとする気持ちがもてるようにした。 ○教師も一緒に遊びを楽しむことで仲介役となり、友達とかかわりがもてるようにした。	泥だんごを上手に作り、友達に教えてあげたことがきっかけで、一緒に遊べるようになった。

Ⅶ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 幼児同士が遊びながら肌と肌が触れ合う経験をする中でぬくもりを感じ、同じ興味を持った遊びを一緒に楽しんだということが心のつながる瞬間となって、主体的に友達とかかわりたいと思う気持ちの芽生えとなることが分かった (Ⅵ-1-①)。
- (2) 教師が幼児の気持ちに寄り添うことは、幼児が安心して遊びに取り組み、自分の思いを出しながら遊ぶ姿へつながり、仲間とかかわることや関係が深まることにおいて、とても大事である (Ⅵ-1-①, ②, Ⅵ-2-③)。
- (3) 自分も仲間に入りたいという気持ちを動かしている要素として、友達の遊んでいる様子がわかり、話している声の聞こえる距離感が重要であり、仲間とかかわることにおいて、遊び空間が影響していると考えられる (Ⅵ-1-②, Ⅵ-2-③)。
- (4) 人とかかわる力を育てるためには、幼児が試行錯誤しながら十分に遊び込める場と時間を保証し、生活の中で友達の良さに気づける場面を繰り返し経験できるような教師の援助が必要であることが分かった (Ⅵ-1-②, Ⅵ-2-③)。
- (5) 幼稚園教育要領「人間関係」の領域から研究を進めてきたが、人とかかわる力は、五領域が相互に関連し合い、遊びを通して総合的に培われていくことから、幼児の発達や個人差に応じながら、援助の視点を広く持ち、各領域の中からバランス良く考えていくことが重要であることが分かった。

2 今後の課題

- (1) 幼児が触れ合うことでつながりを感じているような何気ない瞬間を、一つ一つ大切にしていく。
- (2) 主体性を大事にしながらも、みんなの中の自分であることを感じることでできるような援助を学級経営の中で意図的に取り入れていく。

〈主な参考文献〉

- | | | | |
|------------|------------------------|------------|-------|
| 柴崎正行・森上史朗 | 『身近な環境とのかかわりに関する領域 環境』 | 東京書籍 | 2000年 |
| 河邊貴子 | 『遊びを中心とした保育』 | 萌文書林 | 2005年 |
| 文部科学省 | 『幼稚園教育要領解説』 | フレーベル館 | 2008年 |
| 無藤隆・柴崎正行 編 | 『幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて』 | 別冊 [発達] 29 | |
| | | ミネルヴァ書房 | 2009年 |
| 文部科学省 | 『幼児理解と評価』 | ぎょうせい | 2010年 |